

201) アルバイト

学生の頃、夏休みに友達と3人で東北地方の一周旅行に行くことにした。当時12日間使える周遊券があって、特急以外なら急行も準急も乗り放題で、東北地方内なら何回乗っても同一料金であったから極めて割安だった。メンバーの一人鈴木君は、地方の大地主の息子だったにもかかわらず、大学が休みに入ると、この旅費を稼ぐためにアルバイトを始めた。オイラも家庭教師のバイトを以前からやっていたが、その帰り道、もうすっかり暗くなった田舎道をバス停に向かって歩いていると、後ろの方から、「ちょっと道をお尋ねしたいのですが…」と声を掛ける者がいる。かなり暗がりだったのでオイラは一瞬ドキッとして、恐る恐る振り向くと、薄汚い登山帽のような帽子をかぶって、不精髭を生やした男が暗闇の中で自転車にまたがっていた。良かったひとまず身の危険はないらしい。男は私の方に近づくと、住所の入った伝票のようなものを突き出して、「クサカ市はどのへんですか？」と聞くのである。それはクサカではなくて草加市のことであった。まだまだ自転車だと小一時間はかかるだろう。見れば荷台には瓶ビールが2ダースぐらいも乗っている。「ここは浦和の外れだから、まだ結構かかりますよ」と言いつつ、そいつの顔をのぞき込むと、どこかで見たような顔である。「あの～、鈴木君！」「えっ！そうですけど」「オレだよ！山田だよ！」何のことはない。鈴木君はこんなところで中元配達のバイトをしていたのであります。で、なぜかオイラまで草加市へ徒歩で付き合わされ、その日家に帰ったのは終電になったと言うわけであります。しかしこの鈴木君は過日肺炎で亡くなってしまい、過ぎし歳月を感じたのであります。

